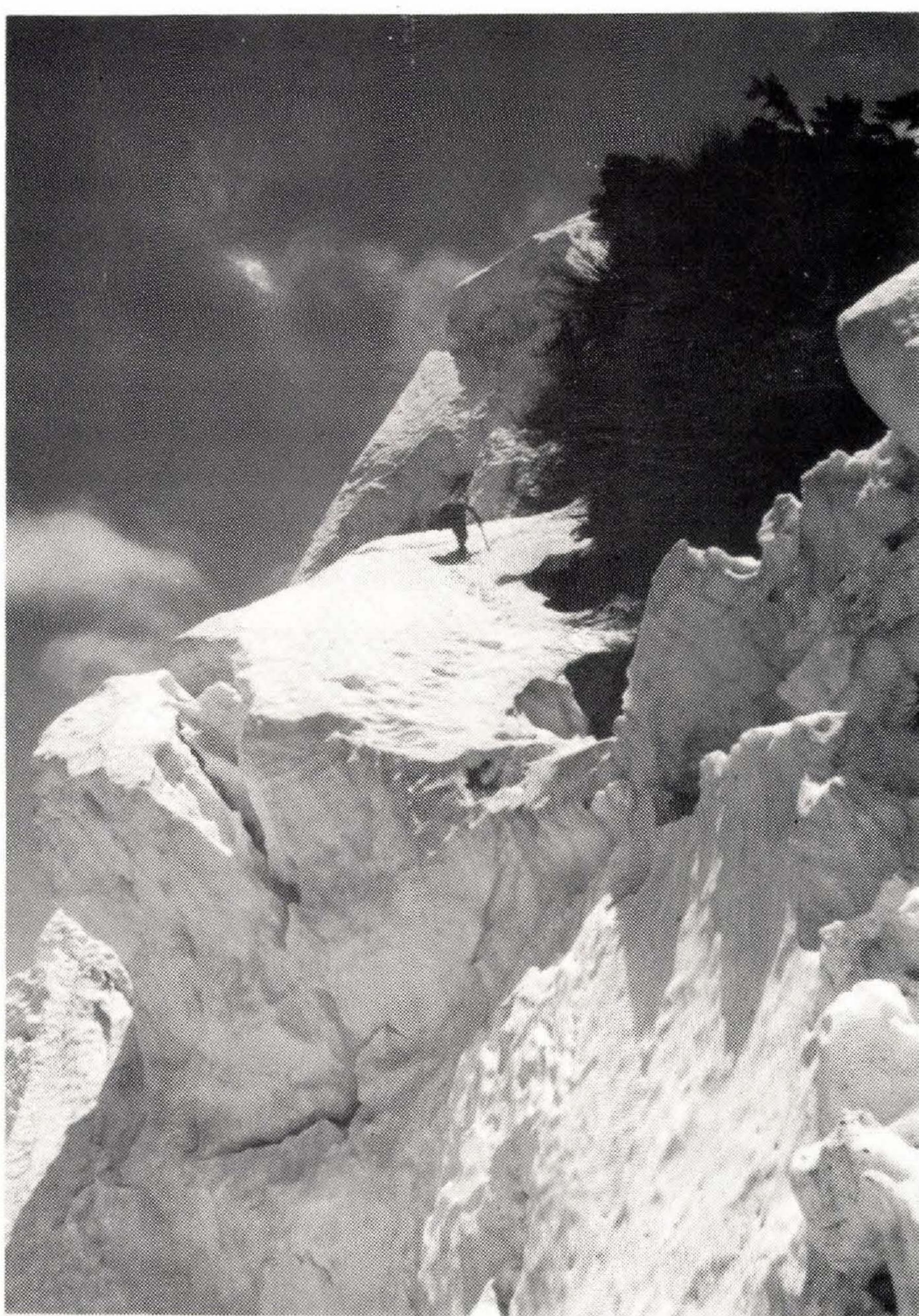


# 針葉樹會報

復刊 第54号 1979年6月



1979.6

—表 紙 の 写 真—

剣岳北方稜線、駒ヶ岳付近を行く。

1975. 4. 28 藤本敏行撮影

## 夕ほんとに眞人間でした……夕 高橋要二君を思う

吉沢一郎

ももつと生きていてもらいたかった。

要ちゃんには悪いが、この頃私はとみに忘れっぽくなってしまって、要ちゃんと一緒に山へ登ったことや、野沢でスキー合宿をやったことなど、すっかり忘れてしまった。本当に何も覚えていない。昔の針葉樹会報第一号から克明に調べて行けば、何か思い出すことが出来るかも知れないが、今は残念ながらその時間がない。唯、要ちゃんの家が、下谷は浅草の観音様に入る雷門の、一番賑やかな通り（仲見世といつたつけ）で玩具屋をやっていたことは覚えている。要ちゃんはその玩具屋さんの息子だったのである。子供を連れて浅草へ行つた時、二度か三度は寄つたことがある。

要ちゃんは何にでもよく感心する人だった。そして御膳や机を爪の先でたたく癖があった。悪意の全然ない人で、人を褒めることが、またもう一つの美癖であった。人を蹴飛ばしたり、足を引っ張つたりして、自分が浮びあがろうなどとは、全く考えたことがないと思う。要ちゃんが一橋を出たのは昭和五年だから、

私より二年あととなる。現在（一九七五年度）の針葉樹会の名簿を見ても、卒業年度が昭和五年となつてるのは、高橋要二君一人で、しかもそれが物故会員欄だけである。だから彼は一人で山岳部に入ってきたものらしい。

また如水会員名簿によると昭和五年度は二七七名卒業しているが、偉い人や有名な人は沢山いても、私が直接知っているのは高橋要

二氏の他に三菱商事の社長、田部文一郎さんと、味の素の社長、渡辺文蔵さんの二人だけである。二氏ともに私は山のことで世話になつてゐるが、昔の府立の一から四ぐらいまでは、頭のいい子が入る中学校として記憶に残つてゐる。そうすると要ちゃんは小さい時から秀才だったのであろう。

針葉樹会員の名簿でひと桁の卒業組では、昭和五年だけが姿を消してしまった。一人で

頑張っている人もいるのだから、要ちゃんに

要ちゃんのことを書いてくれと頼まれて私

は、余りに何も覚えていないので、奥さんの

文子さんのところへ電話をかけ、履歴を送つて下さいとお願ひしたら、大略次のような返事が来た。

“大正十二年三月、東京府立第三中学、現両国高校卒、大正十三年四月、東京商科大学予科入学、昭和五年三月、本科卒業。

卒業後太平生命入社、それから帝國満喫株式会社、その後は吉沢様のお世話にて電通入社となります。

主人もそれぞれの会社で精一杯頑張ったと思います。ほんとに真人間でした。会社をやめてからは時々船本様と六甲山へ出かけておりました。”

要ちゃんが太平生命に入ったのも私がすすめたのだと思うが、私が辞めたあと彼もやめ、国策会社の帝国満喫にいた時は、戦争の重圧がひしひしと感じられていた頃だと思う。

戦後になつてまた私のところに相談に來たので、浅原君に頼んで電通に入れてもらい、私と一緒に仕事をすることになった。これで要ちゃんもやつと少しは安定したのではない

かと思う。

私が大阪へ行くと彼もあとから転勤になり、停年になつてから子会社の方へ移つたが、その頃には身体もかなり瘠せていたようと思う。

要ちゃんは昭和五十三年十一月十一日に息をひきとる直前、「吉沢さんと会つて死にたかった」と洩らしていた、と奥さんは言つていた。

彼があの世へ去つてしまふと、私は彼にとつて余りいい友人ではなかつたことをしみじみと思う。もつと心を入れてあげるべきだつたと思うが、いろいろの事情からそれが出来なかつた。本当に残念に思う。

要ちゃんは二等辺三角形の底辺を上にした

ような、額の広い顔で、若い時はいつも白くて艶があり、若々しかつたが、心配ごとが積み重なつたのか、それに病氣も加わり、入院、通院、薬の生活がずっと続いたこともあり、手以上に顔中皺だらけになつていた。

それでも心の優しい奥さんにめぐり合ったし、一人娘の圭子さんも良縁を得て嫁ぎ、要ちゃんの死後は甲子園のお宅に圭子さん夫妻

も一緒になり、仲良く楽しく暮らしている、ということであるから、私もいささかホッとしている次第なのである。

因みに要ちゃんのお墓は、東京都港区西麻布二一一四一一七、西福寺にあることをお知らせして、思い出の一端を終ることにする。

## 目 次

“ほんとに真人間でした……”

高橋要二君を思ふ	吉沢一郎	1
松浦静雄君	望月達夫	3
奥多摩明暗	鈴木英雄	4
正月の北鎌尾根（一九七九年）		
南岳西尾根から	前神直樹	8
五月の八ツ峰	藤本敏行	11
会務報告	西牟田伸一	11

## 追悼

松浦 静雄君

望月達夫

昭和十二年に専門部を卒業して針葉樹会に入った松浦静雄君が、五月七日午後零時十三分、心不全のため慶應病院で亡くなつた。山岳部に入ったのは昭和十年四月で在部中の足跡は『針葉樹』によると次の通りである。

昭和十年五月神津牧場八風山、六月三ッ峠岩登練習、七月槍穂高縦走、十一月白馬岳、十二月乗鞍岳スキー合宿、昭和十一年一月志賀高原鹿沢岩ッ原スキー、一月富士山スキー、二月霧ヶ峰スキー、三月野沢温泉スキー合宿、三月木曾御岳、四月小金沢黒岳雁ヶ腹摺山、五月立山剣岳、六月八ヶ岳、七月穗高涸沢合宿槍燕縦走。

戦後は針葉樹会の会合などへ殆んど出席しなかつたから、若い人たちで知っている人は少なかつたろう。数年ぐらい前だつたか大病をしたと言つていたが、この度の死因も或い

いはそれが遠因であつたかも知れない。卒業して直ぐ入社した富士写真フィルムでは専務までなつたのだから、少し勤らきすぎたのかとも思う。六十二歳はなんとしても少々若すぎる。

山岳部の海外登山などにフィルムを寄附してくれたこともあり、J A C の図書室建設資金も頼んだら快く出してくれた。

九日の告別式は増上寺で行われたが吉沢一郎さんや久保孝一郎君が行かれた。他に行かれた方もあるかも知れない。私は都合がわるく悔みの言葉をのべた。

心から冥福を祈つてやまない。

○小林修（社3）広大附属福山高校。関取の尾形そっくりの顔を持ち身体も筋肉隆々だが、予想外に純情なハートを持つ。艶歌を好む熱血漢。

○多田由美（社3）湖南高校。山岳部史上に残る我らの紅一点。マネージャーとしてファイト一杯活躍中。

○黒田彰彦（経2）長野高校。山国出身

だが裏山以外の登山経験は無かった。スキーの腕は一級で、女子大スキー部のコチをするという。

○田中賢介（商2）東海高校。純粋さと気まじめさの複合体のような人物。彼の歌う東海高校校歌は一度は聴いてみるだけの価値あり。

○中村宣幸（法2）四日市南高校。由緒ある寺の跡取りであるが、リーゼントを好み、山岳部入部の目的は岩登り。

○土方浩（社2）東邦高校。浪人時代の世谷感を顔面一杯に漂わせたユニークな、しかしハンサムな男。

（8ページへ続く）

## 一橋山岳部現役紹介

## 奥多摩明暗

鈴木英雄

同期の新年会でS曰く「山へ行つたかい」

僕「ああ行つた」「白山かい」「冗談じゃない、三頭山だよ」「ミトウサンてどこだ」「奥多摩だよ」「何だ奥多摩か」、僕が重装備で白山に登れる訳がないし、奥多摩だって冬ともなれば大いに緊張する。それを知らぬ筈はないのだが、いつもの通り至極真面目な表情なのでひやかしたとも思へぬ。此の頃は専ら芝生の上を歩いているようだから話が食い違うのも止むを得ないのだろう。今年の、そしてこの山の初登りをしたのは一月八日、暖冬の好日和であった。早朝の国電はケチケチ暖房で寒かったが奥多摩道路を横切る頃には暑くて汗をかく。頂上附近は十センチの雪。前後して来た若い二人と別れ笹尾根を下る。西原峠からは雪解けで靴は泥まみれ、すねまではねを挙げて数馬に戻った。バスも五日市

立川の乗換も待つたなしで誠に好都合だったが泥を落す暇がなく、ラッシュの新宿に着いた時は乾いて真っ白。さいわい誰にも遇はずに帰宅。玄関で裸になり風呂に飛込めば快い疲効感。弁当包をあけた山の神はきれいに平げたのを見てごきげん。

大寒になつて間もなく天気予報は週末の天候ダウンを告げたので、では其の前にと二五日武州御岳に出かけた。鳩の巣で下車、水の涸れた多摩川を渡れば緩かな登りとなる。

シーズンには賑はう所だが今日は空山人を見ず。十一時大檜峰、樹齢千年の檜の大木が氷川の街を見下ろして立つてゐる。日溜りをみつけて腰を下ろし握り飯をほゝばる。デザートはバナナ、みかん。ほてつた咽に水筒の水がうまい。これからは水平な巻道となり、尾根を廻り谷を渡つて延々と続く。日蔭の雪が凍つて滑るので慎重に進む。御岳の家並が近くなつた頃、前方道下に谷を見下ろす様に佇む人影を見る。いやに背が高く全く動かない。変だ。近づけば木の枝から電気のコードでぶ

かけたが勿論答へはない。うつ向いた黄色い顔は目を閉じ、コードは幾重にも首に巻きつき、垂れた手の甲は紫色にむくんでいる。兎に角人に知らせねばと急ぐ途中で下つて来た二人の若者に遇う。ユースホステルで電話を借りませうと同行、下の駐在所に通報してくれた。巻添へを避けるのが人情なのに何という親切な人達。やがて登つて来た警官数人を現場に案内、職質を受ける。発見者氏名鈴木某。生年、住所、等型の通り。コードを切り担架に下ろして検死。真白な肌着、ずいぶん薄着である。十二時間以上経過。所持品検査で財布、眼鏡、遺書、最後に免許証が出て身許確認となつた。四十七才、土地の者のようである。山仕事に入った者が発見するのが普通でこんな道端は初めてといふ。早期発見を期待してここを選んだものか。「どうぞお引取り下さい、長時間ご苦労さんでした」と放免になつたのは丁度三時。日向和田へ下る時間がなし、ひつそりとした家並の道をトボトボとケーブル駅に向つた。

## 正月の北鎌尾根（一九七九年）

中島

寛

冬の北鎌尾根は、かねてから、一度は登つてみたいと思っていた。最近は、随分俗化したらしいし、ルート自体も易しくなった、と聞くことがあつたが、二十五年前に山登りを始めたわれわれにとって、北鎌尾根は、英雄たちの古戦場というイメージが強い。加藤文太郎が行方不明になる直前、最後に登つたのも北鎌尾根だし、あの松涛明が、「サイゴマデ タタカフモイノチ 友ノ辺ニ スツルモイノチ 共ニユク」という手記を残して、壮絶な最後を遂げた場所もある。一度は、自分の身体でじっくりと確かめてみたかった。これまで何回かチャンスもあつたが、その度に都合つかず、ようやく、四十歳をこして、今年の正月、実現した。すべて、好天とよきた。

パートナーに恵まれたお蔭だが、うれしかつた。

冬の北鎌尾根は、かねてから、一度は登つてみたいと思っていた。最近は、随分俗化したらしいし、ルート自体も易しくなった、と聞くことがあつたが、二十五年前に山登りを

始めたわれわれにとって、北鎌尾根は、英雄たちの古戦場といいうイメージが強い。加藤文太郎が行方不明になる直前、最後に登つたのも北鎌尾根だし、あの松涛明が、「サイゴマデ タタカフモイノチ 友ノ辺ニ スツルモイノチ 共ニユク」という手記を残して、壮絶な最後を遂げた場所もある。一度は、自分の身体でじっくりと確かめてみたかった。

昭和四六年 北岳第四尾根（同行佐藤久他）  
昭和四七年 不帰岳一峰尾根。天気悪く、南沢出合から退却（同行加藤正他）  
昭和四八年 ?（どうしても思い出せず）  
昭和四九年 出張のため、パラグアイのアスンシオンで越年

昭和五〇年 同じく出張のため、アルジェリアからの帰途、パリーバンコク間飛行機のなかで越年

昭和五一年 遠見尾根から五竜岳、鹿島槍ヶ岳（同行藤本、Dr.サイナー）

昭和五二年 黒戸尾根から甲斐駒ヶ岳、仙丈岳（単独）

てくるようで、血が騒ぎ出す。この感じがいい。年にいつぺんのお祭りみたいなものだが、お祭りが生活の節目としての意味をもたなくなつた今日、こんなお祭りでもないよりあつた方がよいだろう。

凡俗の渕に身を沈め、なんだかだと理屈をつけて、最近では、年に三、四回も山に行けばよい方だが、不思議と、正月の山行だけは続いてきた。

日頃は山のことなどすっかり忘れているのに、正月が近づくと、何となく山が気になり出す。理由はよくわからない。正月の休みをどうやって過したらいいか不安になるのかもしないし、アルコール漬けの身体がSOSを発信するのかもしれない。しかし、雪の便りが聞こえる頃になると、通勤の電車のなかで、ふいに、岩登りであぶみに身体を托すときのあの陶酔感や、深雪のラッセルで身体ごと雪の壁にぶつかっていくときの充実感が、生きしくよみがえってくる。そして、めつたに顔を出さない山の道具屋に油を売りに出かけたりする。何となく、山が向こうから近付いた。

昭和五三年 西穂高岳から奥穂高岳、涸沢岳

西稜（同行藤本、杉下、加藤、

後の二氏は会員外）

昭和五四年 槍ヶ岳北鎌尾根（同行藤本、杉

下）

× × ×

今年の場合は、十一月末、日本山岳会の年次晚餐会で加藤君（日本山岳会々員で、去年の穗高縦走の仲間）にばつたり出会ったのが発端だった。加藤君が「今年はどこにしましょうか」と聞く。ちららは、十歳も年下のピ

チピチした山男から、仲間と見なされ、ごく当然のように対等の立場で質問を受けていい気になり、思いつくまま「北鎌あたりどうだろう」と答えたのが、運のつきだった。どうやら、この話は、去年の穗高縦走の仲間に、またたく間に伝わったらしい。一週間後には、藤本君から、「今度の北鎌ですが、ツェルトと雪洞だけでいこうと思うんですが、いいでしょうか。いつ発てますか……」と、年より

の遅巡などおかまいなく、北鎌行きは既に確定した計画として、レールの上を走り出して

いるのだった。彼らは日頃のきびしいサラリーマン生活を通じて、中高年の管理職をおだ

て、うれしがらせて、引張り込む術を心にくいばかりに心得ているようだ。酒をやめるなんてことはしなかつたが、久し振りの本格的な山行でトレーニングには熱が入った。加藤

君は家業の都合で参加できなくなつたが、藤本君と杉下君が同行してくれることになった。

杉下君は藤本君の高校時代の一年先輩で現在東芝の研究所に勤務しているが、名大山岳部OBで、人柄についても技術、体力についても昨年で実証済み。年令が十五歳も十六歳もちがおうが、最高のシェルパを確保したサブの心境である。こんなぜいたくな山行はめつたにない。彼らにまかしておけば何の心配も必要ない。

四・三〇)

葛温泉案内所発（八・三〇）—湯俣着（一

十二月三十日（日）晴

少し雲はあるが、好天だ。水俣川沿いの道は、崩れかけた桟道や岩壁のへつりなどがあつて、大変厄介だった記憶があるが、すっかり整備されて、何の心配もない。千天出合手前の吊り橋も、立派な新しい橋にかわつていてた。

登路は、千天出合から天上沢に入り、P2に直接突き上げてある側稜である。樹林のな

らホワイトホースの差入れまで受けてきた。

十二月三十日（土）小雪

大町駅に降り立つと雪が降っている。マイクロバスに相乗りで葛温泉まで入り、湯俣まで、ダム建設のために出来た広いトラック道

をテクテク歩く。ときどきダンプのお通りで道の隅に追いやられる。この道を歩くのは七年ぶりのことだ、変わつていないと考える

方がおかしいかもしない。しかし、湯俣までくれば、昔と同じ山の世界だ。晴嵐荘の冬期小屋にもぐりこむ。

アルプス五五号（二三・三〇）で新宿発。手分けして持つてきた用具類の点検。酒だけ

は三人とも、まさかのことを考えて多めに持つてきたことがわかり、顔がほころぶ。藤本は、日頃の精進の賜物か、「みね」のマダムか

かに、ところどころフィックスト・ロープなどが張つてある急峻な尾根をいっきに登る。

尾根に出ると、今度は小さなピークを幾つも越していく。天気もいいし、調子も悪くないのでも、今日中に独標あたりまで行けるのではないかと思つたりしたが、どうしてどうして長い尾根だ。結局、無理をするより、快適な生活を楽しみながら登ろうということで衆議一決、少し早いが P4-P5 間コルに雪洞を掘つて泊る。

湯俣発（七・三〇）一千天出合（九・三〇）  
一側稜取付（一〇・〇〇）-P2（一二・〇〇）  
-P3（一三・二〇）-P4（一三・四五）-コル（一四・〇〇）

一月一日（月）快晴、風強し

昨日に輪をかけた快晴。もしかすると、今日中に槍ヶ岳の頂上に立てるかもしない、という淡い希望をもつて出発。

P5-P6 の左側の沢沿いの急登は思ったほど悪くはなかったが、そこから次第に核心部に入ると緊張を強いられる。P7 手前の草つき上のくさつた雪壁の急登などは、藤本ト

ップで登つたが、ザイルなしではとても無理だつたろう。

独標は、左側のチムニーを直登するルート

と、それを避けて、雪壁伝いに右にトラバ-

スし、右上部の岩壁を抜けるルートがあるが、安全を期して後者を探る。途中で、心細そうな単独行者にザイルを使わせ先行させてやる。それにしても、ザイルをはじめ、いざというときの準備のない単独行者が多すぎる。仲間をつくれないはぐれ者か、これが流行なのか。

独標をこすと、雲のあい間から時々、ものすごく大きな黒々とした槍の穂先が、ぬつとその姿をあらわすようになる。小槍の鋭い尖峰が印象的だ。すぐ近くのようだが、長い。独標から槍の頂上までは、距離にすれば前穂から奥穂と同じくらいだから、たしかにそう簡単と考えるのがおかしいかもしれない。北鎌平に着いたところでどうするか考えたが、もう一日好天もちそだだし、無理をして真っ暗ななかを槍の頂上から下るのは嫌な感じがして、北鎌平泊とする。丁度、いい岩蔭があつて、ツェルトが張れた。

雪洞発（八・二五）- 北鎌沢のコル（P7  
-P8 間、一〇・一〇）- 独標頂上（一三・一〇）- 北鎌平（一六・一〇）

一月二日（火）雪のち晴

朝起きてみると、一転して雪にかわつていて驚く。地吹雪も激しいが、何とか槍を越えるくらいはできそうだと判断して、完全武装で出発。ルートはほとんど消えているが、ところどころにあるハーケンを頼りに、ザイルを伸ばす。藤本、杉下両君がトップを交替し、中島は、常にスライディングの形で中に入る。年よりというのはありがたい。というよりは何のことはない、ただ引っ張り上げられている猿に過ぎない。思わぬ雪のお蔭で、団らずも、ようやく自分たちでルートを見つけて、ルートをつくつていいく喜びを味わうことができる。昨日までの二日間はけつして易しかつたわけではないが、きれいに整備された先人の踏み跡をたどつてくれればよかつたのだから。

槍の頂上着一〇時五〇分。相変わらず雪は降り続いていたが、ここはまさに都会の雑沓の

延長だった。感激の握手もそこそこに下りにかかるが、ここでもっとも大切なことは、他チームのザイルを踏まず、登る人にちゃんと道をあけてやるように、交通ルールに気を配らなければならぬことだった。

南岳西稜を経て槍ヶ岳まで縦走してくる倉知、前神、近藤の三人と、出来たら槍の頂上でランデブーする予定だったが、二日続きの好天のために、彼らは前日のうちに頂上に立ち、既に下山した後だったのは残念だった。肩の小屋に着いた頃から、すっかり晴れあがり、最高の下山日和となつた。

肩の小屋から中崎尾根を辿り、途中から深雪のなかを沢に入り、槍平小屋までまっすぐ下る。モミの林にかこまれた槍平の雰囲気は、いつも來ても心を和ませてくれる。夕暮れのなかで黒々とそそり立つ滝谷ドームが美しい。

泊地発（八・一五）—槍の穂先基部（八・五〇）—槍ヶ岳頂上（一〇・五〇）—肩の小屋（一一・五〇）—一二・〇五）—槍平小屋着（一四・三五）

一月三日（水）晴

馴染みになつた蒲田川右俣に沿つた道をかけ下りて新穂高温泉へ。どこか静かな温泉宿にでも泊つて、山行の楽しい想い出をかみしめたい、と思つたが正月中はどこも満員とのことで、やむなく高山へ出る。ことしの「祭り」もとうとう終つてしまつた。しかし、この爽快感は何ものにもかえられない素晴らしいものだ。

・〇〇)  
槍平小屋（七・三〇）—新穂高温泉（一〇

。萬濃英士（経2）富士高校。沈着冷静、絵にかいたような美少年。同期の連中の試験の出来は彼の双肩にかかっている。  
。八尾草一郎（法2）現役随一のロマンティストを自称しているが、それだけに失恋の回数も部内最高の模様。金沢泉ヶ丘高校。  
。八津範之（商2）足利高校。ESSにも属し、国際的岳人を目指している。非常なタフガイ。

（神野 隆）

## 正月の槍ヶ岳

南岳西尾根から

前神直樹

随分と単純な発想ではあるけれど、若い頃槍ヶ岳に一月から十二月迄、全部の月にかかさず登れるかな、と考えたことがあつた。当然のことながら冬の期間の登頂は後に残り、

十二月の槍ヶ岳は大学三年の東鎌よりの登頂に失敗、四年の笠ヶ岳からの縦走でやつと成功、そして一月の槍ヶ岳はサラリーマン二年目の（つまり去年）北鎌からの山行に失敗、今回の南岳からのアタックでようやく成功したというわけだ。これであと二月と三月の槍ヶ岳を残すのみとなつた。三月はともかく、せちがらい生活を続けていた限り二月の登頂は当分無理な話かも知れない。

どんな山行でもそうだがやはり登れば嬉しい。今回は大して苦労した感じを持たずに山頂を踏めたわけだが、就職してこのかた正月の山行では一度もピークを踏んでいなかつ

ただけに、下山した時の酒の味はまた格別だった。

十二月三十日

朝、倉知氏と東京発。計画は高山から新穂高温泉、槍平へ入山、そこから南岳西尾根経由槍ヶ岳往復というものだった。そしてできれば槍ヶ岳にて、北鎌尾根から上ってくる中島、藤本パーティと会う。我がメンバーは倉知氏と去年卒業したばかりの近藤泰君、私の三名である。銀行という因果な職場にいる為暮れの三十日の朝などにはとても出発できな近藤君を残して、新幹線に乗り込んだ我々は、名古屋乗換えて高山へ、連絡もよく何時間かバスに揺られて夕刻、新穂高温泉に着いた。当初の予定では食堂で飯を食つたら適当所にテントを張るつもりだったが、雪はないとはいえないこんな寒々しい所に野営する気にもなれず、暖い蒲団の誘惑にかられて山小屋に毛のはえたような旅館に部屋をとつた。

十二月三十一日

疲れた体に鞭打つて夜行で着いた近藤君を迎える。ぬくぬくと炬燄で寝ていたのが申し

訳けないような気分になる。さて朝食を済ますと出発だ。天気は上々。トレースも鮮明で今冬は雪が少ないという情報をもとにすれば、かなり楽勝のうちに山行が成功するかも知れないといつつい考えてしまう。

一月一日

西穂の牧場までくると先行パーティにかなりお目にかかる。やっと見えてきた槍ヶ岳をバックに写真を撮つたりしながら、夏道と変わらないほどよく踏まれた雪道を進む。滝谷に向かうトレースを出合で見送る。雄滝あたりまではつきり見える。とても恐しくて中に入っていく気がしないようなところだ。この

出合をすぎるとあっけないほど簡単に槍平着

だつた。色とりどりのテントがそこかしこに張られている。我々もここに張る予定だったが、時間も早いので南岳西尾根にいくらかでもテントを上げることとする。ここにもトレースがある。結局、槍平から一ピッチ登り、

天張ったが、周囲に人の声は聞こえず、たかが一ピッチでもかなり槍ヶ岳に近付いたような気になるから不思議だ。三年振りに嚴冬の

になる。三人でささやかながらも大晦日の一時を過ごす。何の物音も聞えぬ静かな雪山でウイスキーを飲み、たわいのない話に興じている時が最高だといつも思う。

岩場もあつたが、現在のルートの大半がそうである様にフィックスが張つてある。ひたすら自分の足でかせぐのみだ。

出発して五時間程で南岳の小屋着。昼食もそこそくによく風の強くなつた主稜線をアイゼンをきしませて槍へ急ぐ。学生時代に重い荷をかついで縦走していた時を思えば、まるで楽な筈だが、体力がその分減つてやはり疲れる。人は随分多い。もう足がふらついてくる頃やつと槍の肩着。北鎌パーティはない。休む間もなく槍の穂に登る。やたらと罵声をあげるどこかの大学山岳部の横をすり抜け、頂上着。独標の辺に雪が去来して光線の関係でブロッケンも見える。聞こえはしないだろうが、北鎌に向つて精一杯のコールをかける。やたらと強い風の音ばかりで、何も返つてはこない。（北鎌パーティはこの時独標付近に居たといふ。）天気が良いとはいえるの冷氣の中にそう長くは居られない。早々に帰路に着くことにする。南岳西尾根のテントに登路をそのまま戻ることはせずに、雪崩の危険はまずなきそな蒲田川右俣を一目散

に駆け下る。登りに十時間近く費した高度も下りとなればみるみる下る。まだ日のある内に槍平に着いてしまつた。そのあつけなさには気が抜ける程だが、今日の行動もこれで終わりと思えば気持が良い。テントに帰ることなどとうの昔に忘れ去り、槍平の冬期小屋に三人分の場所を見つけると飯もそこそこに寝てしまう。水が洩る心配など何もないところでシュラフに入ることほど嬉しいことはない。他の泊り客がチョットうるさいのが気にかかるけれど。

一月二日

倉知さんと僕はロープウェイを使って西穂に登つた。一つの山を終了した後、また別の山に登り返すなど四十に手の届こうとする人の山やることじゃないなとまたもや感心する。ともかく天気に恵まれた実に良き冬山でした。何年に一度位のペースでしか冬のピーカにはこれからも立てないかも知れぬが、「下手な鉄砲も数打ちや当たる」式に精一杯數でかせぐしかない。

一番最後に、この山行で最も印象に残つたのが、一月三日の晩に高山で飲んだ酒の味と、その店の秋田から来たという美人のママの顔である。年末ぎりぎりまで働かされて、年初も四日から仕事に精出さねばならぬ近藤君はとにかく帰京せねばならない。南岳西尾根上に残してあるテントを近藤君と二人で撤収すると、早速新穂高を目指して歩き出す。滝谷出合からのドームが何とも凄じい。「よくこんな谷に入る気がするな」と行きと同じように感心してしまう。

結局この日は、帰京する近藤君と別れて、



## 五月の八ツ峰

藤本敏行

経由とした。

五月三日（快晴）

早朝の大町駅で三人顔をそろえる。皆東京からだが連休の夜行にそろって乗り込むことなど不可能に等しい。タクシーで扇沢迄入り、

トロリーバスを待つ長い行列の最後につく。

風雪、短い日照時間、そうして無雪期には密數、その全てから解放されて自由に奥深い山に思い切ったルートが取れる。時間に余裕が無くとも結構充実した山行ができる。ところがそうした良さを想うばかりに、何処へ行こうかと何時も迷う。岩と雪の稜線は必要条件だし、スキーも使える処で、なおかつ人の少ない、三千mはあつた方が良い、という次第である。

バスを待つ連中の大半はスキーヤーだ。さぞかし室堂は華やかなことであろう。ダムの地下駅でバスを降り、五〇mもトンネルを歩くと眼前が開けて黒部の谷が深く切れ込んでいた。目指す内蔵助谷出合は陰となり見えぬが、

黒部別山がその位置を教えてくれる。スキーヤーはもう居ない。

処々雪の消え残った黒部の河原に降り立ち、  
（一六・四五）

五月四日（快晴）

今年の連休は八ツ峰を末端から登ろうと決めた。日程は五日間。入山路を室堂から別山乗越に取り、取り付き迄の剣沢や長次郎の下りをスキーでやろうという案も出たが、八ツ峰を第一に取りスキーはすてた。メンバーは三人、前神、杉下（名大OB）、それに僕である。五月二日夜行新宿発、入山は内蔵助平

べ雪が格段に少ないと言っていた。

大休止の後、再び行進開始。暑さと睡魔と

鬪いながら黙々と歩きハシゴ谷乗越へ辿りついたのはそろそろ吹く風も冷たくなるとする頃であった。初めて八ツ峰が姿を現わした。

一峰が素晴しく高い。僕等が登ろうとしている一峰第三稜は丁度正面の為かなり急に見える。早々に下りにかかり小尾根を一本廻り込むと眼下に天幕が数張りみえた。日影に入った急な谷をまっすぐテントめがけてかけ降りた。剣沢右岸の台地上にツェルトを張る。

ダム発（九・三〇）—内蔵助平（一三・〇〇）—ハシゴ谷乗越（一五・四〇）—剣沢

東壁の下で大休止を取る。振り返ると猫の耳が美しく高い。別山の南尾根のキレットはなるほどすごい。暑い暑いとボヤきながら内蔵助平へは昼過ぎに着いた。十数張の天幕が、もう少し奥へ行けば静かなサイトがいくらでもあるのに、最後の登りを終えた平の入口にひたすら登る。三〇分も登るともう陽光を背張られている。前神は学生時代に来た時に比

出だからP1付近を目指して急な雪面を

中に浴びるようになり今日もまた暑くなりそうだ。前神の調子がすこぶる良い。僕は最後をトボトボ行く。P1の肩から左側の急なルンゼに入る。いわゆる滑り台ルンゼというやつで、影になつてるので雪は堅い。P3より稜上を進み、P4に着く頃にはもう雪はすっかり腐っていた。P5の登りは、雪が着いていたなら素晴らしい雪稜となるであろう岩と這松の稜線を避け、右側の急な雪壁を10m程トラバースし直登する。初めてザイルを出し、杉下氏トップで登ったが、腐った雪のステップが今にも崩れそうで怖い思いをした。P5の上でゆっくり休む。もう後は一峰迄ひたすら雪稜をつめるだけだ。右側には第四稜が、左側は第二稜が、一峰頂上より剣沢になぎ落ちている。四稜は特徴あるマッチ箱状の岩峰を除けば問題なさそうだが、第二稜はマイナーピークの岩壁が手強そうだ。振り返ると五竜や鹿島槍がなつかしい姿をのぞかせている。

前神は本当に調子が良く、もう大分先を歩いていた。知らぬ間にマイナーピークが僕等

より低くなり、細く急な雪稜を登ると一峰頂上だった。目標の第一段階は完了である。八ヶ峰の稜線上には行動中のパーティが幾つか見える。一峰からひと下りした処に、雪稜を削ってつくった幕営地があつた。腐った雪に神経を使って進むより、明朝雪の堅い間に距離を稼ぐ方が利口だ、どうせ五、六のコルあたりは人で一杯だ等々、かつてな理由をつけまだ早いがツェルトを張ることにする。一方では天候は明日も良いに違いないと僕達は信じ始めていた。夕方迄のひと時、残り少ないウィスキーを飲み、煙草をふかし、日光浴をする。

腐った雪の斜面をCフェース取付へと向かう。取付きでアンザイレンし、つるべで登る。剣稜会ルートは雪もさほど着いておらず夏と同じ様だが、アイゼンを脱ぐのも面倒だし雪壁にトレースがあるので、ほぼトレース通りにまつすぐ登った。しかし全然頼りにならない這松をつかんで急な腐った雪壁を登るのは気持の良いものではない。終了点では、三個のザックをコルよりかつぎ上げてくれた前神が、「眠る閑がなかつたよ」と言つて待つていてくれた。

再び八ヶ峰主稜を辿る。六峰の下りでアプ

ザイレンを一度、七峰は恐る恐るスタッガツ

トで下り、急登の後の八峰の稜線は本当にナイフエッジと呼ぶにふさわしい、細い雪稜だった。間近にそびえるチンネの左稜線には、殆ど各テラス毎にクライマーの姿が見える。八ヶ峰の頭は省略し池ノ谷乗越へとトラヴァースする。

乗越に荷物を置き前神、藤本は剣の頂上を往復する。夕暮れの締り始めた雪に用心してコンティニアスで歩いていると、大学五年の五月、二人で北方稜線を歩いた時の事が想い出される。頂上で剣尾根を登ってきた神戸の二人連れのパートィにバーボンを御馳走になり喜びは最高調に達する。杉下さんの顔が目に浮かぶ。池ノ谷乗越へ戻ると杉下氏が、融水をコップヘルにためて待っていてくれた。ツェルトを張り、アルコールはもう切れてしまつたけれどまた楽しい夜が始まる。

出発（六・五〇）—五・六コル（九・三〇）—ICフェース取付（一〇・一五）—終了点

（一二・一五）—池ノ谷乗越（一五・一五）—剣頂上（一六・〇〇）—池ノ谷乗越（一

## 六・四五

五月六日（快晴）

とうとう四日目の朝も快晴で明けてしまつた。最低一日は雨で、ビショ濡れになることを覚悟してきたのに。

下山は最短路である池ノ谷を下ることに決め、池ノ谷ガリ―を三ノ窓へと下る。途中、

本峰を越え下山する感じの二人連れに会う。三ノ窓ももうテントが二・三張り程度しかなく静かにチンネがそびえている。連休も終わりだという気がしみじみとする。

剣尾根の側壁に見とれながら池ノ谷をトコトコ下り、最後のゴルジュを駆け抜けて、白萩川の河原でゆっくり休む。上流に目を向ければ白ハゲ、赤ハゲあたりが望まれる。冷い水で顔を洗い、煙草をふかし、短かった割には面白かったこの山行を反芻してみる。しかしお互いひどい顔になつたものだ。この顔にネクタイをしめてまた会社に行くのである。

出発（六・五〇）—三ノ窓（七・〇〇）—白萩川出合（八・四五）—馬場島（一〇・

## ◎会員住所・勤務先等変更

坂井溢弘（旧姓山本、昭四一卒）〒273-01

千葉県鎌ヶ谷市鎌ヶ谷四四八一一  
鎌ヶ谷コーポラスN-302

戸川哲哉 横浜市神奈川区六角橋五-三六一  
四

東京都立大学大学院博士課程在籍  
井草長雄 武藏野市吉祥寺南町五一八一二五  
八千代荘

## 編集後記

会報第五四号をお届けします。

× × × ×

今日の東京の気温は二九度とか、知らぬ間にまた夏が来たようです。サミットを目前にひかえて省エネルギーが叫ばられていますが、資源の問題はさて置いて、そんな風潮には関係なく、暑ければ汗をかき、寒ければ身を震わせる生物としての人間であり続けたいとつくづぎ思います。

（藤本敏行）

# 会務報告

西牟田伸一

高橋要二氏（昭和六年卒）

昭和五三年一月一日逝去

松浦静雄氏（昭和一二年卒）

昭和五四年五月七日逝去

一、昭和五三年度忘年会  
○日時 昭和五三年一二月二六日（火）

謹しんでおくやみ申し上げます。尚、針葉樹会として香奐（各一万円）をお供え致しました。

○場所 如水会館 南北日本間  
○出席者 吉沢一郎、松木謙三、近藤恒雄、

冠木伊右衛門、金田一郎、

手塚晴雄、鈴木英雄、中島孚、  
柿原謙一、小林重吉、望月達夫、  
佐々木誠、日江井正己、宮城恭一、  
佐野茂雄、久保孝一郎、佐藤政雄、  
山崎拡、小泉三好、横山暎一、  
景山豪治、倉知敬、西牟田伸一、  
藤本敏行

当初予定していた映画の鑑賞が映写機の故障で出来ず残念であった。尚、会の途中で後述する中西君見舞の募金をお願いしたところ、多額の御寄付を戴いた。

ます。

尚、中西君は義足の装着も終わり、この四月より元気に復学しております。

世話人 金子晴彦  
" 西牟田伸一

## 中西君見舞金の件

昨年、一橋山岳部の春山合宿で左膝上切断の重傷を負った中西茂君に対する見舞金を会員諸氏にお願い致しましたところ、下記の通り多額の見舞金が寄せられましたので御報告致します。締切日（一月三一日）以後に寄せられた金額については基金として積立て頂き、何らかの有効な利用法を考えたいと思

## 中西君見舞金会計報告（54.5.30現在）

収入	支出
* 1. 募金 409,000円	* 2. 見舞金 340,000円
利息 286円	経費 1,000円
収入計 409,286円	支出計 341,000円

残高 68,286円

\* 1. 会員58名より計381,000円、学生より6名計28,000円

\* 2. 現金330,000円及び写真集「穂高」

---

故太田可夫教授十三回忌及び

「哲学の碑」建立について

甘利仁朗

---

かつての山岳部長・可さんの十三回忌追悼会が来たる七月四日午後六時から如水会館で催されます。これを機に、国立の森の中に「哲学の碑」を建立することがその席で話し合われます。山内得立、中山伊知郎、大平善悟、板垣与一、高橋泰蔵、高橋長太郎、増田四郎の諸先生方をはじめ、大先輩多数出席されます。

可さんの庭でサンマを焼いて酒をくみ交したあの思い出を懐しむ方々の御参集をお待ちしております。



針葉樹会報 復刊第 54 号

発行日 1979 年 6 月

発行人 針葉樹会会长 望月達夫

編集人 藤本敏行

印刷所 大栄印刷

